

# 知っていますか？ 郷土の民話

## 上三川城の最期

上三川城の最期は、有名なお話の一つです。これに関する伝説や民話は多く伝わっていることから、城が人々の心の中で大きな存在であったことがわかります。この思いが落城後、400年以上も経過した平成の世に、何代にも渡って語り継がれてきました。

天正18年の春、豊臣秀吉が小田原城を攻める際に、この地を治めていた宇都宮国綱は、豊臣氏に服従し所領を安堵されました。その後朝鮮出兵にも従いましたが、家督を継ぐ男子がいまませんでした。そこで秀吉は、側近浅野長政の次男を養子にしてはと話しました。国綱は秀吉に逆らっては万が一のこともあると思い、大坂詰めの重臣上三川城主今泉高光と北条松庵に相談し、秀吉の提案を受け入れることとしました。

しかし、これが国綱の弟、芳賀城主の高武の耳に入りました。高武は「宇都宮家は関東一の名家。他家よりの養子を引き受けるのは北条、今泉の取り持ちによるもの」と大変怒り、大坂に行き豊臣秀吉に破談を申し入れると、松庵を京都四条河原で斬殺したのです。

怒りの収まらない高武は、一挙に上三川城を襲い今泉高光を襲おうと、家臣の小倉長左衛門と常陸坂戸城主小宅三左衛門に命じ、慶長2年5月4日に上三川城を攻めました。三左衛門は手勢70人を率いて虚空蔵の森に兵を伏せ、長左

衛門は手勢約120人を従え六ツ瀨八幡の森に集結し、防備が無いとの連絡を受けると、一斉に城に攻め込みました。不意を突かれた城内は一瞬にして修羅場となり、城主高光は数名の家臣とともに長泉寺に入り自害し、嫡男宗高は家臣に守られ何とか兵庫塚に落ち延びました。一族郎党のほとんどが自害した上三川勢は敗北し、覚悟した高光の奥方は火の海と化した櫓の上に駆け上り、懐剣を喉に突き立て自害しようとしたが、手元が狂い片目を突いたままお濠に飛び込みました。その怨霊が片目の泥鰌どじょうとなって永くお濠に住み着いたといわれます。

夜が明けた5月5日は端午の節句でしたが、上三川の人々は悲しみ、亡くなった人々への哀悼の意を表しました。そして、これ以後上三川では端午の節句に幟のぼりを立てない風習になったといわれます。

また小倉勢が伏せた虚空蔵尊は一大事にもかかわらず、何のご加護もなかったことから、これ以降人々は「コケ蔵様」と呼んだと伝えられます。



400年前城址公園は悲劇の舞台となりました

## た報短歌

田舎家の冷えに倦みをり久々に

炭火熾して火鉢にゐたり

庭土の湿りに仰ぐ切枝の

楓は春のつゆを滲ます

稲葉 敬子

降るように木々から人へと語るごと

散る桜はなびらの静けさにあり

桜はなびらの頬に寄り添い幽かなる

香りに浸り春惜しみけり

菊地 美代

彼岸会の膳ととのえる厨まで

菩提寺の鐘かね浄ずみて届きぬ

信仰の山々歩み歌われし

友の短歌に心こころ浄ずまざる

武藤 ひさ

高架道の開通の刻待ち受けて

カミナリ族の轟音とどろなる

天空の淡き眉月まゆづきくきやかに

深夜の便べんのライト絶えなく

高田 幸子

里道の岐かれに居をわす野仏の

傍かたえに開ひらくにほんたんぽぽ

ひとり来し城址の堀ほりに花はなびらは

片寄せられつつゆるく流るる

斎藤アツ子